

緊急被ばく医療に対する広島大学病院放射線技師の取り組み

広島大学病院 診療支援部 ○隅田 博臣 (Sumida Hiroomi)

木口 雅夫 西丸 英治

広島大学緊急被ばく医療推進センター

神谷 研二 谷川 攻一 矢野 佳子 東 久哉

【はじめに】

広島大学は1999年発生したJCO事故以来、原子力災害、放射線事故等に伴う緊急被ばく医療対応を担う西日本ブロックの三次被ばく医療機関として選定されている。その役割の一つとして原子力事業所立地・隣接府県での原子力防災訓練等の支援や自治体と連携して被災者の搬送や医療支援を行っている。

本報告にて広島大学の放射線技師が三次被ばく医療機関でどのような対応をしているかを示すと共に、放射線技師に「何を求められているか」「何を知っておくべきであるか」を報告する。

【方法・結果・考察】

「緊急被ばく医療推進センター」の放射線技師は、「放射線災害に関する知識の習得と対応能力開発」「原子力防災(災害)の情報収集と振り返り検証」「二次被ばく医療機関や自治体・他への講義・実習への対応」「自治体からの要望へ対応(防災訓練への参加と講評など)」など日頃より取り組んでいる。

情報収集では、放射線医学総合研究所での研修会受講をはじめ、REMNETからの情報収集¹や緊急被ばく医療の発祥の地でもあるアメリカOak Ridge Institute (REACT/TS)にて様々な研修を受講している(Fig.1)。また、規制庁²から配信されている資料も重要な情報である。これらの情報の他、防災訓練などに参加した際の情報も重要となる。特に福島原発事故での対応は貴重なデータとして様々な防災訓練で活用している。

次に緊急被ばく医療推進センターでは、二次被ばく医療機関での除染(医療処置を伴う)訓練の実技指導や講習はもとより、原子力防災訓練の避難所設営から運営における助言や講評を行い、問題の解決と被災者の方の安全な避難誘導について指導を行っている。昨年より、日本放射線技術学会中四国部会では各県を回り放射線技師に特化した内容で緊急被ばく医療の講義とサーベイメータを使用した汚染測定の実習指導も行っている。

2011年の福島原発事故以降、緊急被ばく医療の対応は大きく変わった。大規模災害に対する医療機関や自治体の対応と要望、情報収集能力とシステム構築能力の開発、放射線技師の立場と責任の重さなどである。今後、緊急被ばく医療で放射線技師に何が求められているか周知することは重要となっている。これまでは汚染測定に重点がおかれていたが、放射線物質による汚染のコントロールも重要な任務となり、そのためには幅広い知識、様々な職種との連携(報連相)は必要な能力となっている。緊急被ばく医療に放射線技師が係わる場合、「何を求められているか」を知っていることは「放射線技師の資質」へも大きく影響する。また、放射線が関与する災害(事故)は原発事故のみでなく様々なタイプがあること、緊急被ばく医療も進化していることも意識し、状況に応じた対応ができる柔軟さも身につけておくことが必要である。そのためには、日頃から知識の習得とこれまでの事故の振り返り(検証)が必要で、放射線技師が必要と思われるためには、自己研鑽は重要となる。

福島原発の事故以降、各地で放射線技師への要請の声が高まっている。放射線技師に求められていることは「測定だけではない」ことを認識し、適切に対応されることを切に願います。

【まとめ】

緊急被ばく医療においても、「人命最優先である」ことを意識し対応して頂きたい。他職種を尊敬し連携すること。自己主張や自己解決を行わないこと。常に行動(対応)に対して検証(振り返り)を行うこと。責任を持てる発言や行動を行うこと。

これらが緊急被ばく医療のみならず職能として信頼を得る重要なことであり、信頼されている放射線技師は緊急被ばく医療に対応できると確信する。そのような人材育成が重要となっている。

【参考文献・図書】

1. REMNET(緊急被ばく医療の情報発信サイト) <http://www.remnet.jp/>
2. 原子力規制委員会ホームページ <http://www.nsr.go.jp/activity/bousai/measure.html>



Fig.1 Oak Ridge Institute(REACT/TS)での課題解決トレーニング風景



Fig.2 診療放射線技師対象の研修会
山口大学医学部附属病院にて